



安齋正弘

福島県生まれ。木耐協設立当初から技術顧問として組合員の指導や技術開発を行う。2007年国土交通大臣表彰。趣味は社交ダンス

◎今号のテーマ

# 一般診断法 「劣化・腐朽、 評点」 についての考察

「2012年改訂版 木造住宅の耐震診断と補強方法」の質問・回答集の確認

熊本・阿蘇周辺をメインに発生し継続する余震に、国中は元より国外でもその推移に固唾を飲んで居る。収束の確認も出来ないまま本原稿の脱稿を迎えているが、被災・避難生活を強いられておられる方々への言葉もない。ただ、国外を含む沢山の皆様の支援には、日本国民であることに誇りさえを感じるのには私だけではないと思います。一日も早い収束と立ち直る意気を願うばかりです。

りです。(昨日まで在った家が今日は倒壊、という「余震の怖さ」をしっかりと肝に銘じて日々の活動に活かして欲しい)。

さあ、今月もこの回答集をめぐり、内容・趣旨を確認し日々の実務に活かしてまいります。日本建築防災協会に掲載されている文章は、下記ホームページアドレスから直接ご覧下さい。

〈注〉紙面の都合上HPに掲載されている文章から、趣旨を外さない程度に表現を変えています。

<http://www.kenchiku-bosai.or.jp/seismic/kodate/wquest.html>

## Q98

耐震診断時に既に補修された項目があった場合、劣化部分に含める必要がありますか?

**A** 原則は劣化部分に含めませんが、補修のグレードなどにより、適切にご判断下さい。

## 考察

要するに補修により、「劣化改善の効果が認められるか、どうか。」ということでの、適切に判断…ということなのでしょう

ね。ただし、劣化低減係数は【建物全体に影響】するので劣化の判断は慎重に行う必要があります。

## Q99

筋かいなど釘打ちによる接合でも耐力を認めていますが、「さび」により劣化した場合は、どのように考えれば宜しいのでしょうか?

**A** 「さび」の程度などにより適宜壁基準耐力等を低減するなど、適切に判断してください。

## 考察

この件については皆さんも結構悩ましい問題ではないでしょうか。筋かいの場合は(特に旧耐震時代のもの)接合金物の不十分さから「引張りも圧縮」に期待していたのも事実でしょうから、そんなに低減を考える必要がないようにも

思えますが、大地震時に「引張られて外れてしまったら、圧縮時に効いてくれない!」心配があります。正直小生にも「適切な判断」はむずかしい!全体を見て、臨機応変…でしょうかネ。

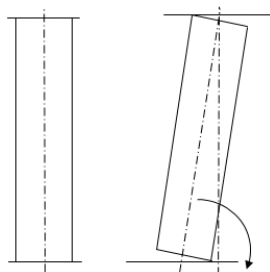
## 〈評点〉

(P54) 上部構造評点の判定において「倒壊」とは、建物がどのような状態をいうのでしょうか?

**A** 建物の変形角が安全限界変形角(通常の構法では1/30)を超える状態を示します。

## 考察

多くの構造種別や木造の場合、壁系も軸系も1/30とされているようです。木造で1/30というと、3mの高さで100ミリの変位。柱頭の柱心が柱脚の柱面から飛び出しています(図)。自力では戻れません。つまり靱性(ネバリ)がないと自重で自滅(自壊)するということです。またこの安全限界変形角というのは地震だけでなく暴風時の検討でも同じ扱いです。



図

## Q100